校長室だより～燦燦～ №４４８

教師のしあわせ

2021.10.28

「作家のしあわせ」という文章を読んだ。そこには、次のようなことが書かれてあった。

執筆という作業はまったく楽しくない。もっぱら楽しげな内容の作品を書きがちなので、「著者も楽しんで書いてそう」というイメージを読者にも与えがちだが、どっこい真実はエブリタイム、私は仏頂面である。ただただ「しんどい」「おもしろくない」「くるしい」、このあたりをぐるぐると回りながら、さながらアリジゴクの巣に囚われたアリの如く、巣から脱出しそうになったら砂をかけられ、穴の底に落とされる。連載開始から三年目、書けども書けども終わりが見えない作品に、私は心底参っていた。

されどあるとき、原稿に向かいながら、ふと思った。「今の自分はしあわせではないか」小説家になろうともがき苦しんでいた、二十代のほとんどの時間、私は自分を「しあわせではない」と捉えていた。しあわせとは小説家になることゆえ、それになれない自分はしあわせとは程遠い存在だった。

ならば、ありとあらゆる余計なものをそぎ落とし、余計ではない最低限のよろこびすら自粛しながら、執筆を唯一の目的として、すべての時間を注ぎ込む今の生活は、まさしく自分が求めていた、しあわせの最終形ではないのか。

作家とは言わずとも、教師になりたくてなった方であれば、前述のようなことが起きてないだろうか。働き方改革といえど、毎日毎日、退勤時刻に帰ることができる日などない。朝も早くから出勤している。休日も部活動の指導のために学校に来る。せっかく来たのだからと、少し仕事もしていく。これでは、まったく「しあわせ」ではないかもしれない。愚痴や不満も言いたくなるだろう。

しかしである。なりたかった教師として活躍できているのである。そう考えると、しあわせではないか。人間とは、常に「ないほう」のしあわせを求める傾向がある。実に欲深で厄介な生き物である。

多少の不満はありながらも、教師として仕事ができている。このことに、しあわせな気持ちを感じることはないかもしれない。だが、しあわせな状態ではある。問題は、しあわせな気持ちが得られるかどうかである。

多忙を極める日常の中に、ふと教師のしあわせを感じることはないだろうか。あるいは、大きな行事などが無事に終了し、笑顔あふれる子どもたちの表情を見たときなど、しあわせを感じるのではなかろうか。

多くの先生方は、これからも、しあわせな状態とは意識しない生活を送りながらも、ふとした一瞬のしわせな気持ちを追い求めていくのだろう。教師にとって、しあわせな気持ちにさせてくれる対象が、子どもたちである。